

子どもの『気どり』に関する一考察

我慢の美意識

●宮田雅智

■はじめに

気どっている子どもはいつでも他の子どもと比べてずれていることを好んで行う。そうした、集団の中で一人だけみんなと同化しようとせずにいる姿が周囲には「気どっちゃって」「お高くとまって」等々の良くない印象を与える。

しかし逆にいえば気どりは子どもにとって必死に自分を高めようとしている姿ではないだろうか、と考えたところに『気どり』をとりあげた動機がある。

子どもが気どる背景にある意識や感情についてはすでに「子どもの『気どり』——主体的な『生』の一段階」（昭和六一年、茨城大学特殊教育特別専攻科修了論文）でことばのスナップをもとにひと通り考察を進めたが、それぞれのことをただ網羅的に羅列するに終ってしまった。

そこで先の論文でとりあげた意識や感情を発達段階の順序に並べかえ、気どりを人間の自己実現過程の中

に明確に位置づけようと考えた。
ただし今回は新しいスナップも考察に加えてはいるが、あくまでも先の論文で得た結果の抄訳であることを予めお断わりしておく。

■気どりの位置

① 自他未分化の段階

言うまでもなく人間は誕生してしばらくの間は自分という意識がうすい。それゆえあくまでもその行為はマイペースであり、周囲の状況を判断して自分の行為を限定することはほとんどみられない。

② 行為限定の芽生え（我慢の発生）

周囲の人間との関わりの中で子どもは喜ばれる行為と、やれば叱られる、大人には歓迎されない行為があることを認識し、喜ばれることをくり返し行うようになる。

しかし子どもにとってここにはしばしば我慢が伴う。ただ無理して立ったり歩いたりして転び痛い思いをし

たとしても、「立った、立った」「歩いた、歩いた」と喜ぶ周囲の声を励みにして頑張っていく。

③ 第一次反抗期（自分意識の芽生え）

この時期の子どもは「自分です」「一人でやるの」等々の言葉が表に出てくる。大人から「まだ無理」と言われても「大丈夫」と言っただけで失敗する。

こうした態度は自分を高めるために無理に背のびをしようとしているというより、ただ単に自分の力を試してみたいという意識の表れとみた方が適切であろう。「自分」というものを知るためにどこまで出来るかわからないが、とりあえず模倣してみよう、という性格のものであると考える。

④ 優劣の意識の芽生え

いろいろなことを模倣していく中で子どもは自分と他人の違いに気がついていく。そしてあるひとつのことが出来る、出来ないによって優越感や劣等感を抱くようになってくる。と同時に、友だち同志が能力の差についてひやかしたり貶しあったりするようになって

くる。そして次第に自己のイメージを形成していくのである。

⑤ 気位の芽生え

一メートルぐらいの高さの所に立っている真希子に「落ちるなよ」と声をかけると、ムツとした様に

「私、飛び降りるんだもんね!」
と言うが早いがボンと飛び降り「どうだ」と言わんばかりの顔。「うまいな」と誉めてやると胸をはり

「四歳だもん!すごいでしょ!」

四歳女子

学童保育所でリーダー格の子の発言

「おれたち、一年生とは違うんだ!」

小2男子

子ども映画会で『リボンの騎士』というアニメを観ながら私に、

「私、あんな幼稚っぽい映画嫌い」

へ面白いじゃない」

「幼稚っぽいよ、おめー、こんなの面白いの、あはじゃねエー?」

小三女子

二年生の男の子がテレビヒーローのポーズを真

似しているのをみた森君。

「チェンジマンでやってるやつだ。あの赤ちゃんばいの」

と、その子を軽べつしたような目でみる。

小三男子

いつも乱暴で男子を追いかけまわし、とっ組みあいをしている女の子が自分の服の乱れを気にしていたので「一応気にするんだな、おまえでも」と言うと、ちよつと赤くなり、

「そりや女ですもの。」

小五女子

みんなにくすぐりまわされた石田さんが

「あたしやつかれたよ」

と言うのをきいた村井さん、

「おい、おまえ四年だろ。あたしなんて使わないでくれ」

村井、小六女子、石田、小四女子

気どりを考える上で大切なのは、年齢や立場に相応した行為が順次身についていかなければ恥ずかしい、という意識が芽生えてくることである。ただし、相応した行為と言ってもそれは社会通念上のものであり、地域や家庭によつて多少差異がある。これには周囲の大人からの「もう一歳なんだから……」「男(女)の子のくせに……」などの言葉がけや、友だちからの「まだこんなこともできないのかよ」「一年生のくせに」「幼稚っぽい」「なまいきだ」等々の貶し言葉が大きな影

響を及ぼす。

他人との関わりの中で自分の年齢や立場に応じた立居振舞を頭の中にイメージしはじめると同時に、気位の意識が芽生え、イメージに従つて自己の行為を限定しはじめるのである。

⑥ 見られる意識の発達

『でんでん虫』のかえ歌を大声でうたう。まわりの子が笑うと得意になつて歌詞をエスカレートさせていく。

「月でーん、むーしむーし、はーなくそくーん。どーこまーでー、いーくの、はーなくそくーん。つのだせ、やりだせ(きわめて強く)ちんこーだせー月」

小一女子

プールの男子更衣室で、パンツ一枚で踊ったり、おしりをみせてまわっている子がいる。

「おまえ、六年生にもなつて恥ずかしくないのか?、まだがきだな。」と言つてやると

「ヘン!!ちゃんと生えてるよ!若いだろ!」

小六男子

以上のことと並行して発達してくるのが、他人に見られていることを気にする意識である。幼児期においては、ただ周囲の視線が自分に向いていれば安心する。この頃は恥らしいの意識もそれほどないため、目立つために「ウンチ」などのことは口にしたたり、性的な悪ふざけなどを平気で行う。それを見て困りが自分のことを笑つてくれたりすることを期待している。

こうした行為がいつまで残るには大きな個人差がある。一年生でもポーズを決め、恥ずかしい行為によって目立つことはしようとしないうちにもいれば、先の例のような六年生もいるのである。そうした方法以外には、周囲の目を引くことができないということもあるが、いかなる方法であれ、わざと目立つ行為をし人の目が自分に集まることである種の優越感を得ようとするのである。

気どりも、目立つ行為ではあるが先の例のように目立つためにみんなの受けを狙うような迎合的な態度とは根本的に異なる。他人への迎合では気どりにはならない。気どる者にとっては、たとえ目立つことができたとしてもわざと品位のない行為をすることは見つけないことなのである。

⑦ かつこつける意識

床に落ちていた破けて腕のとれてしまっているぬいぐるみの人形をみて、
「かつこいー」

小三女子

幼児の頃から子どもはテレビのヒーローや乗りものなどのかつこいいものにあこがれる。これが学童期になってくると「かつこい」と評価するものが多様化してくる。幼児期にかつこいとしていたものだけでなく一般にはかつこ悪いと思われるものでも、それが目立ち、発言者にとって特別の印象を与えてくれるものであったのなら「かつこい」とされることが増えてくるのである。この例の場合でも、発言者にとっては恰好が本当に美的に良いのではなく、自分にとって目を引くものであったことが「かつこい」というこ

とばを言わせているのだと考える。美的な裏づけがない場合、一度かつこいといと評価したものにすぐ逆の評価を下すこともよくみられる。

ホウ酸を水に溶かす実験で温度が下がるにつれてピーカーのまわりにホウ酸がついてくるのを見て

「何、まわりについてかつこつけてんの」

と言ってる前川さん。

へ別にホウ酸はかつこつけようとしてくつついてるんじゃないよ」

と言われると我にかえったように

「あつ、ホウ酸はかつこ悪いんだ」

小四女子

本人がかつこつけることを意識したか否かにかかわらず、それが周囲にとって気を引くものであったのなら「かつこい」「かつこつけてる」と言われてしまうことが多い。こうして最初は無意識にとられていた行為に、特別の美意識が伴うようになってくる。子どもは自分の立居振舞の型や身なりに気をつかうようになってくる。

ただし、実際に子どもが意図的にかつこつけようとして行うことには個人差がある。これは「かつこい」とするものの個人のイメージの違いによる。たとえば服装にしても、わざとボロボロであったりダブダブの服をかつこいとして好んで着る者もあれば、おしゃれとして品位ある着こなしとして落ちついた身なりをする者もいるのである。

目立つことでかつこつけようとする行為には言葉使いもある。

「おりがみちょうだい」と言ってくるので「何色？」と聞きかえすと、ちよつと赤くなつてひとこと

「レッド」

「何かつこつけてんだよ」というとさらに赤くなつて

「いいじゃんかよ！」

小三女子

このように外来語を使うことをある時期から盛んに始めることがある。和語とは違うそのひびきにかつこよさを感じているのである。

⑧ 気位の高まりの時期

四年生以上が参加できるスポーツ少年団のミニバスケットクラブで、今日から新しく四年生が参加するという日、五年生の打越君が教室にいる時から「恥ずかしい」と言つて落ちつかなかったという話を耳にした。そこで本人にそのことを聞いてみると赤くなつて

「だって…恥ずかしいじゃん」。

その日、打越君をはじめ五・六年生たちはやけにはりきつて練習に打ちこんでいた。

小五男子

音楽の時間、急きよ三年生が教室に見学に来ることになりクラスの中が騒がしくなる。すると大門君がみんなにむかつて

「おい！ こういう時こそちゃんとしろよ！！」

小四男子

遠足の作文より。苦勞した道中について書いたあと

「…登り終わってから少し歩くと伊豆ヶ岳山頂についた。一だんと景色がよく、つかれがふつとんだ。さすが六年生の遠足だと思った。」

小六男子

大そうじの時、床のぞうきんがけ当番のうち、女子を全員窓ふきにまわす。男子たちは人数が足りないといふ文句を言い始めるが、その中で剛君だけは

「えっ、床、男子だけ？」

へいいだろ

「あつ、いやいや、男子だからこそりっぱなそうじを見せることができるんだよな！」

小四男子

もしも世の中の人間すべてが自分と同じような立場や性格であったとしたら、比較する対象は得られず、自分なりの気位など高まらない。また、たとえ複数のいろいろな人間がいたとしても、今日の子どもも集団にありがちな同じ場所にいるだけという集合的な希薄な友人関係の持ち方では気位は高まらぬ。

多種多様の友だちや兄弟などとの積極的なかわりのできる場でより気位は高まっていく。

この時期には、漢語をよく口にするようになる。その語の持つひびきのかっこよさ以上に、漢語を口にす

ることで子どもはより自分が高まったという気分に浸り、それを周囲に認めてもらうことを期待していると考えられる。

チャボの世話をしている三年生の女の子たちに女の先生が声をかけた。

「いつもニワトリの世話、熱心ね」

すると、その中のリーダー格の子が不機嫌な顔をして

「失礼ね！私達、飼育栽培してるのよ！」

図工の時間、糸のこぎりであまく板が切れず悪戦苦闘している森さん。オーバーにため息をついて大きな声で

「何でこううまくいかないんだろう。人生って…」

小四女子

⑨拒否するふりをしたがる時期（氣どりの成立）

音楽ファイルの表紙を自慢気に見せてくるので「よくできたな」と頭をなでてやると目は笑いながらもムツとした態度で

若原「ごめんね！ごめんね！」

〔参考〕この児童には次の様な発言もある。

「正義っていつも勝つからやだ。一回ぐらい負けてもいいのに」

小四女子

気位が高まり、高い次元の行為をすることを心がけるようになる。子どもは自分の本音、欲求を素直に

表面に出さなくなってくる。自分と他人の間に気持ちの上で上下の隔りを基け、自分のポーズを整えているために安易にみんなと同じようなことをしようとはしない。それ故、この例のように、大人に誉められても素直に喜ぶことを表向きにはしなくなってくる。

海で遊んでいる時、なかなか水の中から防波堤に上がれず悩んでいる男の子がいた。何とか他の友だちと同じ方法で上がりたいのだからうまくできない。友だちにもっとやさしいやり方を勧められしたが、きっぱりと

「そんなの、おれのプライドが許さねー!!」

しかし顔は今にも泣きそうである。

小一男子

気位に裏づけられた自己規制には我慢が伴う。周囲に対して拒否的な態度をとるのであるが、これはあくまでもふりであり、本音は素直に周囲に応じたいのである。しかし、それをすれば自分はみんなと同じレベルになってしまう。

幼児期～学童初期にかけての拒否的な態度は自分の欲求を通すためのわがままであることが多いが、この場合の拒否は自分の本音がかなうことを拒否するのである。

より高いレベルに自分を見ることができたとしても、あくまでもこの我慢はやせ我慢である。それ故、いくら自分を高くみせるためにポーズを決めたり、難かしい言葉を使うことで自分の構えを支えようとしても我慢の限界を越えてしまうとその構えは容易に崩れてしまう。やせ我慢をしはじめた頃の子どもは、構えが崩れた後の感情の処理のしかたがわからず、崩れる

と同時に涙を流してしまうことも多い。

構えが今にも崩れそうであるから周囲にもそれを容易に見やぶられてしまう。「本当は、りしたいくせに、無理しちやうって」と言われてしまっても、図星だけに反論できない。

三年生の森君が四年生の金田君とプロレスごっこ。森君はすぐに金田君にはがいににされてしまふ。

金田「おめーなまいきだ。このやろー、ギブアップしろ」

しかし森君は断固拒否。

金田「ギブアップしろっていうの。早くノマイッタって言えばいいんだ。」

すると森君は

森「私にはプライドというものがある。」

横で見ていた私が質問。

へすごいな。プライドというものがあるのか。ところでプライドって何？」

森「うーんとね、誇り、誇りノ」

へ誇りって何だよ」

森「名誉、名誉」

金田「名誉って何？」

森「いろいろとね、表彰されたり、すごいことしたら誇りを持てること。」

とうとう森君はギブアップしなかった。

理科の実験に

「何事も懸命じゃないと世の中生きていけない。」とブツブツ言いながら取り組んでいる浜野君。

なかなかうまくいかない。「みんなのやってることも参考にしてみろよ。」と言うと

「人の真似なんかしたくない。」

とキツパリ。自分でやり通した。

小四男子

時期を経て、我慢することが板についてくると見るからに無理をしているという様子はみられなくなってくる。自分に誇りを持ち、「我慢させられてる。」「無理して我慢している。」「という気持ちから「自分はこのふうには我慢できるくらい大きくなったんだぞ」「自分から進んで我慢してるんだぞ。」「という意識に変化してくるのである。

ひとつ残ったごはん。おかわり希望者は四人いた。するとまっ先に希望して配膳台の所に行っていた柳田君。たった一言

「じゃ、おれはおちる」

と言った後はだまって自分の座席にもどる。

その姿をみた浜野君。

「かっこいい」

小四男子

授業参観のために教室にはられたスナップ写真のうち、指揮のポーズをとった高橋由希さんをみて、四方田さんが

「ユキちゃん、気どっちゃって！」

小四女子

女の子たちが同じクラスの太郎君のことを貶しあっている。

「太郎って、かっこつけすぎてから超嫌いだ。」

小一女子

四歳の女の子がうでぐみをしているのをみて軍司「何、なまいきにかっこつけてんの？」

小二男子

私がズボンのポケットに手をいれているのをみて

秋元「かっこつけるんじゃねーぜ。」

小四女子

やせ我慢の行為、あるいはわざと難かしい言葉使いやかっこつけたポーズを見せられた方の反応はさまざまである。「かっこいい」「よくそんな言葉知ってるね」「きまつてる」等々相手を賞賛する者もいれば、そうした姿を見せられたことで自分が負けそうな気になり（あるいは、とり残された気になり）何とかして相手の構えを崩しにかかる者もいる。

「気どっちゃって」「お高くとまって」「なまいきに無理しちやうって」等の言葉は大なり小なりこの構えを崩そうという意識を含んでいる。時には嫌悪感情をも含んでしまふ。

そうしてゆきぶりをかけることで高く見せようとする者の構えを崩し、自分と同じレベル、あるいは低いレベルに相手を引きつり降ろそうとするのだと考えら

れよう。

小学校の時期では「気どっちゃって」よりも「かつこつけちゃって」という言葉が使われることが多いようであるが、その根底にある崩そうという動機は同じであると思う。

また、ここでさらに問題にしたいのは、気どっている（かつこつけている）とされた方よりもそうした評価を与えた者の方である。そもそも「かつこつけている」「気どっている」の言葉を使うからには、発言者自身「気どる」「かつこつける」ということにまつわる心象を当然意識しているはずである。そうした貶し言葉を頻繁に使うことが逆に自分が気どっているということを示しかねない。相手から「そういうおまえこそ気どってる」と言い返されてしまうのである。

⑩「気どり」以後（気どりの潜在化）

自習の時、さわいばかりいてみんな課題に나っている算数の練習をほとんどしなかった時をふりかえった学級委員の山本君の作文より

「ぼくは今日先生がいなかったので自習です。ハッハッハッ、グワッハッハ。気分はいーんでござんす。気どっているぼくはさんすうれんしゅうをやったります。」

小四男子

自慢気にポーズをとってる佐野君。

「おれ、学校で一番かつこつけてるって言われてるんだぜ!!」

そしてビデオにうつった自分の姿をみて

「おっ、かつこいい!!色男!!」

小五男子

意図的に「気どる」「かつこつける」ことを始めた時期の子どもは、「気どっちゃって」「かつこつけちゃって」と言われることに喜びを感じる。また先の例のように自画自賛することもみられる。

しかし、こうした言葉が自分に対する貶し言葉である気がつき、わざと高ぶった行為をすることが周囲に嫌な印象を与えてしまうと気がついた頃から気どった行為は徐々に表だつて行われなくなることが多くなくなる。気どる心は潜在化し、無理な構えをわざとらしくとることをしなくなるのである。

ただ、潜在化といってもこれには大きな個人差があり、中にはかなりの年齢になってもわざとらしく外見をとりつくりうことをやめない場合もある。こうした差は、「より高く」として描いている自己のイメージの差による。無理をしてでも常に自分を高く見せようとするだけで良い、とするか、本当に質的に自分を高めようとしているかによって変わってくる。

気どりによって周囲に示している姿は、あくまでも背のびした姿でありそこには実体がない。それは無理に作りあげた自分であり、いわば虚像である。しかし気どりを肯定的に見れば、背のびをすることによって生じた現実の自分との差異には、これから自分がさらに向上していく可能性が秘められているとも言える。

この差異を本当に自分を高めることによって埋めていく努力をせぬ者は「口ばかりで何もできない。」「できもしないのにたいしたふりして」と批難されてしまう。

気どりの潜在化とは、自分を背のびさせるのをやめることではない。本当に自分の実力が伴い不自然さが

なくなる為に、気どつてると周囲の目には映らなくなることでなければならぬと考える。

■ 我慢の美意識

気位が高いことは人間にとって必要なことではある。しかしそうした意識があまりに表にでてしまうと一人だけ周囲から浮きあがってしまった他人とのつながりが希薄になってしまう。人間が社会的な存在であり周囲と調和して生きなければならぬ以上、時には自分が表に出ることを我慢する必要がある。そうした姿に日本人はある種の美意識を伴わせてきた。自己規制することを「我慢しなければならぬんだ。」と理性で自分を納得させることによって行なうのではない。時には進んで身を引くという生きざまに美しさ、かつこよさを感じるが故にそうするのである。また、自己規制によって生ずる欲求不満も、より良き周囲との調和のために自らそうした行為を取っていることができているという満足感や誇りによって包み込んでしまうのである。気どりは、その様な生き方へ到る道の一本であり、一過程であると考ええる。気どる心が潜在化し、つつしみ深さと結びついた時、その人の生き方には奥ゆかしさがにじみでてくるのではないだろうか。

○ おわりに

気どる心が潜在化し、つつしみ深さとう結びついていくのか、などを考察していくことは現在の私にはできない。現在、私が持ちあわせている資料はほとんどが学童期までのものである。今後、中学生以後の資料なども新たにそろった時、この点についてもさらに具体的な考察を進めてみたいと考える。

（藤代町立六郷小学校教諭）